

『今月の天候と農作業』

通巻第5596号
11月号
平成28年10月6日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

暖かい空気に覆われるため、向こう1か月の気温は高いでしょう。

【 確 率 (%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	30	50
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	30	40	30

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

向こう1か月の平均気温は高い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 10月8日(土)～ 10月14日(金)

低気圧や前線の影響で雲が広がりやすく、雨の降る日もありますが、期間の後半は高気圧に覆われて晴れるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2 週目の予報> 10月15日(土)～ 10月21日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 10月22日(土)～ 11月4日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆普通期水稻

収穫時期は慌しく、一瞬の油断や操作ミスがケガや事故につながるので、慎重に作業しましょう。

1 適期収穫等

収穫適期は、不稔籾を除いた全籾数の8割が黄化した時です。ほ場ごとに籾色をよく観察します。倒伏によって茶米や穂発芽が発生している場合には、刈分けを行い、全体の品質が低下しないようにしましょう。風雨でほ場にゴミが流入していると、機械の故障の原因になるので予め除きます。まいひかり等の晩生品種については、収穫5日前までは間断かん水を行い根の活力を保ちます。

2 乾燥調整

高水分の生籾を高温で急激に乾燥すると胴割粒が発生しやすくなります。熱風温度は40℃以下で、毎時の水分減少は0.8%以下で行い、仕上げの玄米水分は14.6～15.0%となるようにします。

複数の品種を扱う場合は、機械や袋等の清掃はこまめに行い混米防止に努めましょう。

◆大豆

1 排水対策

今年は播種作業が遅れ、十分な培土ができず畦も低いほ場が見られます。湿害対策を徹底するため、排水溝の埋没等は早めに補修しましょう。

2 病虫害防除

ハスモンヨトウの発生が多く、葉の食害が見られます。カメムシは生育後期まで莢を加害し、被害が激しいと収穫時期になっても落葉せず青立ちのままとなります。ほ場を観察し、農薬使用基準を遵守して、防除を行いましょう。

◆ソバ

子実肥大期に入るので、降雨後に停滞水のあるところは追加で排水溝を設けるなど、こまめな管理が重要です。特に水田では周囲に溝を設置すると効果的です。

(荒砂 英人)

施設野菜

◆共通事項

今年は台風の影響で定植が遅れているところや、ほ場への浸水等により元肥が流亡しているところがあります。定植後の防除を徹底するとともに、土壌のpH・EC等を確認し、草勢が衰えないよう、追肥の時期を早める等の対策を行いましょう。

急な冷え込みに備え、暖房機をいつでも稼働できるように準備しておきます。また、内張ビニルの設置が終わっていないほ場では、早目に作業を終え、しっかり準備を行いましょう。

暖房用燃料を節減するためには、ハウス内の気密性を高めることが重要です。ハウスの外張ビニルに破損や隙間がないか確認しましょう。また、内張ビニルは谷部やサイド部分のつなぎ目に隙間ができやすくなりますので、丁寧な作業に心掛けましょう。

◆きゅうり

ハウス抑制栽培は主枝の収穫期で、側枝も発生し、早いものは側枝からの収穫も始まります。側枝の発生を良くするため、やや多目のかん水を行うとともに主枝の摘心が遅れないよう注意します。最初の追肥は、主枝摘心の1週間前に行い、その後、側枝の果実肥大が始まる時期から定期的に施用します。側枝の収穫開始以降は、収穫の最盛期を迎えますので、草勢が低下しないよう注意しましょう。また、光線の透過を良くするために、主枝の摘心後、中段の葉から順次摘葉を行います。

促成栽培は育苗期の後半から定植時期となります。苗床では、徒長しないよう昼間は十分日光にあて、本葉2.5枚以降は昼温25℃前後、夜間は14℃を下限に管理します。

◆ピーマン

促成ピーマンは整枝・誘引期になります。この段階での枝づくりは年内だけでなく、全期間の収量を左右しますので、注意してください。第2分枝を主枝としますが、第3分枝が強い場合には、ねん枝等を行い主枝の伸長を促します。また、着果が多く、草勢が弱い場合には、1～2番果を摘果し、草勢を維持しましょう。かん水は畦全体に十分かかるように行いますが、軟弱徒長を防止するために過度のかん水は控えます。

◆トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトは定植後、異常茎（メガネ）の発生を抑制するため、かん水量を制限した管理を行っていますが、大玉トマトでは、第1花房の肥大が始まる第3花房開花期、ミニトマトでは、第5花房開花期を目安にかん水、追肥を開始します。かん水開始時期が遅れると肥大不良や生理障害等が発生するためタイミングを逃さないよう注意してください。

◆いちご

育苗期の高温の影響で炭疽病の発生が多く、台風等の影響で定植時期が例年より遅くなっています。台風により浸水・冠水したほ場では、防除の徹底や施肥管理に注意してください。

花芽分化は例年並みで、頂花房の発蕾は10日前後と予想され、同時期に第1次腋花房の分化期となりますので、遅れないようマルチ被覆を行うとともに、追肥を開始します。

追肥は10a当たり窒素成分で0.3～0.5kg/日を液肥で施用します。

（黒木 正晶）

葉茎菜類及びいも類

◆台風後の対策

生育の変化に留意しながら、病害防止や草勢の回復のため、薬剤散布や追肥・葉面散布を行ってください。

また、収穫物は、腐敗等の流通事故発生を避けるため、選果・選別に注意してください。

◆キャベツ・レタス

キャベツは播種後120日～150日で収穫期を迎えるため、結球具合をみながら随時収穫しましょう。

レタスは12月出荷の定植期、2～3月出荷の播種期となります。生育適温は15℃～20℃ですので、本ぽでは12月上旬にはトンネル被覆が必要となります。

◆しょうが

降霜の前に収穫することが必要となるため、霜の早い地区では下旬頃から収穫を行います。掘り上げたら、できるだけ早く茎を切り落とし、茎やシートで塊茎を覆って乾燥を防ぎましょう。

◆食用かんしょ

5～6月に植え付けたものの収穫期です。食用かんしょは生育日数が130日以上になると、過肥大によりいもの形や皮色が悪くなりますので、今月中には収穫を終えましょう。

◆さといも

中生種の収穫期となります。「枯れ上がり症状」の見られたほ場や、「芽つぶれ症」や「乾腐病」の疑いがあるものについては翌年の種芋としては使用を避けてください。

また、今年の疫病の初発には、残渣処理の不徹底によると思われる事例がありました。収穫が終わったさといもの畑の片付けでは、残渣の分解を進めるため、トラクタ速度を遅く、ロータリー回転を高くし、できるだけ細かく破碎してください。また、残渣の畑付近の空き地への放棄は決してしないでください。

◆ほうれんそう

加工用では厳寒期に収穫する作型の播種期となります。地力の高い排水の良いほ場を選定し、深耕や排水溝等を事前に準備します。また、除草剤は土壌が乾燥しすぎた状態では効果が劣るので土壌水分が適湿の状態散布しましょう。

(杉村 幸代)

果 樹

1 常緑果樹

◆極早生温州みかん

収穫が終了した園地では、樹勢回復のため、施肥・かん水を行います。収穫後に秋枝が発生すると翌年の花芽が大きく減少するので、発芽が見られなくなる10月中旬以降に実施しましょう。また、窒素成分の葉面散布は樹勢回復に効果が高いので、5～7日間隔で3回以上行いましょう。

◆完熟きんかん

今年は、6月下旬から7月の花が結実している園が多く、地域やハウスによってばらつきが見られます。結果の遅かった園では、上旬までにビニル被覆を行い、昼間の温度は28℃、夜間は21℃以上を目安に加温することで、果実肥大を確保しましょう。

◆マンゴー

今年は収穫の遅れから、新梢の発生や充実が遅れている園地が多く見られます。そのような園では、夜間の加温と昼間の高温管理、葉面散布により、新梢の緑化を早めましょう。

最近、果実の軸腐病の発生が増加しています。樹冠内に残る枯れ枝に発生する黒色の胞子が軸腐病の原因です。ハウス内の胞子の密度を下げるため、加温が始まるまでに枯れ枝を全て取り除きましょう。炭疽病対策と併せて、施設内の剪定残渣は全て施設の外に持ち出しましょう。

2 落葉果樹

◆礼肥施用

収穫後の樹勢回復が不十分だと、翌年の新梢発生や開花結実が悪くなります。根が活発に活動している10月に施肥を行いましょう。

◆くり

収穫後のイガは、実腐病、モモノゴマダラノメイガ等の越冬場所となり、翌年の発生源となるので、土中に埋めるなど処分しましょう。

(山口 和典)

花 き

◆花き全般

10月に入ると夜温が低下してきます。特に、中山間地域では急激に低下し、降霜による被害の恐れもあります。施設栽培では保温・加温だけでなく、微生物農薬のダクト散布が実施できるように暖房機のダクトを早めに設置してください。

◆キク

秋ギクの「神馬」は、10℃以下の低温に遭遇すると幼若性の獲得により開花遅延を起こす恐れがありますので、早めに加温準備を行い、適正な温度管理に努めましょう。また、年内出荷作型においても親株が高温に遭遇すると、生育中の低温により開花遅延を起こす場合があるので、保温・加温を行いましょう。

◆スイートピー

今月の中下旬に発蕾・開花が始まります。草勢が弱い状態で開花・収穫を行うと草勢が著しく低下し、減収の原因になります。中旬までに、収穫に耐えられる株づくりを行い、収穫開始は葉の大きさ等から判断して下さい。

曇天後の強日射や高温による生長点の焼け等、天候の急な変化による障害が発生しやすい時期になるので、根域を十分に確保するとともに光線管理等に注意しましょう。

◆デルフィニウム

中山間地では本格的な収穫が始まります。極端にかん水を控えると花のボリュームが低下しますので、適宜かん水や液肥の施用を行いましょう。収穫後の品質保持の処理では濃度や処理時間を厳守してください。

平坦地については中旬頃に発蕾が始まります。ボリュームを確保するためにかん水・追肥等適切な肥培管理を行ってください。

◆トルコギキョウ

生育初期に乾燥状態になると活着・発根が悪くなるので、十分にかん水しましょう。また、葉先枯れの発生しやすい品種については、草丈が10 cm前後の頃のかん水を控え、根系の発達を促し、併せて定期的にカルシウム剤を散布します。

追肥が後半にずれ込むとブラスチングの発生につながりますので、初期重点の追肥になるように液肥を施用してください。

◆キイチゴ（ベビーハnz）

生育に適する気温となり、伸長量が増え、秋の本格的な収穫が始まります。来年度の生育確保のために樹勢に応じてシュートを残し、規格に達したものは地際から収穫します。葉傷み等で出荷できないものは来年3月に芽吹きでの出荷が可能ですので、必要に応じて芽吹き用として残してください。

（中村 広）

畜 産

◆家畜

朝夕の寒暖差が大きい季節です。子牛、子豚、幼雛は温度変化に特に弱いので注意が必要です。適切な温度管理や換気を行いましょう。3ヶ月齢までの子牛は寒さに弱く、腹部が濡れた状態では風邪などを引きやすいので、敷料をこまめに取り替える等、牛舎環境に注意しましょう。乳牛に関しては、10月に入っても暑熱のストレスを受けています。ヒートストレスメーターをチェックし温湿度指数（THI）が67を下回る時期まで、牛舎ファンを回す等の暑熱対策を続けましょう。

養豚では疾病予防のため、豚舎の消毒はもとより、人、車両、物資の消毒を徹底しましょう。

養鶏では冬場の鳥インフルエンザに備え、防鳥ネットの破れや隙間がないよう点検を行い野鳥や野生動物の侵入を防ぎましょう。出入り口の消毒、鶏舎周辺の石灰消毒なども徹底しましょう。

飼料用イネの普通期栽培については、収穫時期を迎えます。糊熟期～黄熟期の収穫時期を守り、適正水分になるよう50～65%でロール・ラッピングします。予乾の目安は約1日です。予乾が長すぎて水分が40%を下回ると乳酸発酵せずサイレージに調製できませんので、乾かしすぎに注意しまし

よう。イタリアンライグラスやエンバク等を植え付ける前には土壌分析を行い、適正な施肥管理（苦土石灰、ヨウリン等）を行いましょう。

近年、ゲリラ豪雨や局地的大雨が観測されるようになりました。ほ場に水が溜まると、湿害等により飼料作物の生育が阻害されます。畑に長時間水が溜まる場合は、排水するようにしましょう。

（須崎 哲也）

工芸作物

◆茶

1 秋整枝の実施

秋整枝は春整枝に比べて芽揃いが良く、摘採が3日程度早くなる反面、12月～3月の凍霜害を受けやすいため、防霜施設の有無等茶園の立地条件と品種の早晩性等を考慮して実施します。

① 整枝の時期

秋整枝は、平均気温が18度以下になる頃を目安に行います。山間地域は9月下旬～10月上旬、広域霧島地域は中旬、沿海地域は下旬頃となります。

近年、秋冬期の高温で秋整枝後に再萌芽する事例がみられますが、30cm四方内の再萌芽数が20芽以下であれば、収量・品質への影響はありません。

一方、秋整枝の遅れによる越冬芽の充実不足は、収量・品質に影響が出てくるため適期を逃さないよう注意しましょう。

② 整枝の高さ

整枝は、最終摘採・整枝面から3～5cm上で、葉層を8センチ以上確保できる位置で実施します。なお、秋と春の2回に分けて整枝する場合は、秋整枝は春整枝より一、二節高い位置で実施しましょう。

2 病虫害の防除

今年は、カンザワハダニが多発している茶園が目につきます。裾刈りや秋整枝後の防除と冬期防除（マシン油）を実施し、ダニの越冬密度低減を図りましょう。

また、県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が確認されています。この害虫は、成虫が茶園を飛び回りますので、茶園の観察に努めましょう。

なお、本害虫に対する問い合わせや、見慣れない虫を発見した際は、最寄りの農業改良普及センター等へ相談してください。

（黒木 清人）

◆しいたけ

1 水分管理と環境整備

9～10月は、しいたけの基となる原基の形成が盛んな時期です。この頃
の原基づくりがしいたけの発生量に大きく影響しますので、ほだ木の水分補
給に努めましょう。

また、暗くなったほだ場は間伐や枝打ちを行い、日光や降雨の入りやすい
明るい環境にするとともに、風が強く、乾燥しやすいほだ場は、防風ネット
の設置等の環境改善を行い、ほだ起こしや秋子の発生に備えましょう。

2 原木の伐採

クヌギやコナラは、通常10月下旬～11月下旬の間で、葉の3～7割程
度が黄葉する時期に伐採するのが適期とされていますが、同じ地域でも、そ
の年の気象条件や立地条件によって伐採の適期が変わります。気象や原木の
状況等に注意しながら、伐採に向けた準備を始めましょう。

(永野 学)

◆たばこ

本年の通常期販売も来月で終了となります。未出荷の方は出荷するまで、
適切な貯蔵管理を行うようお願いします。今月は、来年作に向けての準備が
主な作業となります。

1 来年作の準備として、日当り・風通し・排水等、条件の良いほ地を早
期に選定しましょう。

新作地や借地は、事前に前作物の情報収集と土壌診断を実施し、来年作の
施肥設計の参考にしましょう。

2 夏期・冬期深耕、耕耘作業は土壌環境改善と病原菌密度低下のための
重要な作業です。深耕、耕耘を繰り返し行い、耕種的防除に努めましょう。

3 良質堆肥10 a 当1200kg以上の使用に向けて、堆肥材料を確保し
ましょう。切り返しは適度な水分状態（60％前後）を保ちながら、月1回
程度、年7回以上行い、腐熟促進に努めましょう。

4 出荷後は、来年の出荷規格遵守に向けて貯蔵庫・作業場の整理整頓及
び清掃を行いましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

10月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発 生 状 況 と 防 除 対 策
普通期水稻	いもち病 ※※	やや多	中山間地域や常発地での発生が見られます。葉いもちの発生が多いほ場では穂揃期に液剤または粉剤で防除します。
野菜・花き類	ハスモンヨトウ等 チョウ目害虫	やや多	大豆、かんしょのほ場調査およびフェロモントラップ調査による誘殺数は平年より多く推移しています。幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め若齢幼虫期に防除します。
施設野菜全般	土壌病害虫	—	台風等による大雨で圃場が冠水した場合は、土壌消毒の効果がなくなり、疫病や青枯病、線虫等の被害が発生する恐れがあるので、排水対策を十分行うとともに、必要に応じて再度土壌消毒を行います。
トマト	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	—	いずれのウイルスも、微小害虫（タバココナジラミ、ミナミキイロアザミウマ）によって媒介されるので、施設開口部には必ず防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を防止します。これらの微小害虫は、一旦増加すると防除が難しいので、発生初期の防除が重要です。特に、ミナミキイロアザミウマが媒介する黄化えそ病(MYSV)に注意が必要です。
ウリ類	黄化えそ病(MYSV) キュウリ・メロン 退緑黄化病(CCYV)	— —	
いちご	炭疽病、萎黄病 その他の病害虫	— —	苗床で炭疽病、萎黄病が発病した場合は、その周囲の苗も感染苗と見なし、適切に処分します。また、定植初期からうどんこ病やハダニ類が発生するとその後の多発につながるため、定植前に苗の防除を徹底し、本ばに病害虫を持ち込まないよう注意します。
果樹全般	果樹カメムシ類	—	今年はチャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシともに誘殺数は少なく推移しています。 地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
カンキツ類 (露地栽培)	黒点病 ミカンハダニ	やや多 並	黒点病は感染源である樹冠内枯れ枝の除去に努めるとともに、降水量が少なくても1ヶ月毎の防除を行います。 生息密度が高くなってからでは防除効果が期待できないので、発生初期（寄生葉率30%、または1葉当り虫数0.5～1頭）に防除します。 収穫前の早生みかん等では収穫前使用日数等に注意します。
茶	カンザワハダニ	やや少	防除適期は越冬前の10月中下旬ですが、気象要因による変化が大きいので、茶園を観察して防除の必要性および時期を判断します。 同一系統薬剤の連用を避け、抵抗性の発達防止に留意します。
	クワシロカイガラムシ	並	薬剤散布量は成木園で10a当たり1,000リットル程度を目安に、専用噴口を使うなどして枝幹に十分かかるようにていねいに散布します。
	チャトゲコナジラミ	—	成虫は新芽に、幼虫はすそ部古葉に寄生するためよく観察し防除を行います。
1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。 2) ※※は注意報を発表しています。 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、http://www.jpnpn.ne.jp/miyazakiです。			

